

最終章
ツナガル言葉
【鷗外／現代エンド】

見上げれば、赤い月。夜空にぼっかりと、まあるい穴が覗いている。どこをどう歩いたのか……。喧噪が聞こえる。その方向へと、私はゆっくりと歩を進めた。

「あれ……？」

そうだ、私は日比谷公園にやって来たんだ。今夜は満月だから。でも足を運んだその場所は、いつもの雰囲気とはまったく違う。奥には神社まであるようだった。頭上にはかわいい提灯が連なり、その下にずらりと並ぶ屋台。子供たちがはしゃいでいる。調子はずれな音楽に、道端で芸を披露する大道芸人たち。……どうやら今日は、縁日だったらしい。思わぬ人混みの中で、私はきよろきよろと周囲を見回した。

（チャーリーさんはどこにいるんだろ）

またいつものようにふらりと現れるとは思っただけ。

「やあ、芽衣ちゃん」

案の定、チャーリーさんはどこからともなく現れた。

「いやあ、会えてよかったよ。探しても探しても見つからないから、そろそろ帰ろうかと思っていたところなんだ」

「……勝手に帰られたら困るんだけど」

（危なかった！）

得体の知れないこの人のことだから、約束を反故にされたって不思議じゃない。

「今日がお祭りだったなんて知らなかった」

「満月の夜はね、生き物の血が沸き立つのさ。じっとしてはいられなくなる。そして……」

彼は目を細め、大きく腕を広げた。

「少し不思議なことが起こりやすくなるんだ。僕の奇術が時空の壁を壊し、君をこの時代に運んだようにね」

「その壁、ちゃんと直しといたほうがいいと思うけど……」

これ以上犠牲者を増やさないために、と私はつけ加えた。

「はは、でも楽しかったろう？」

（人の気も知らないで）

気楽そうに話す奇術師に、少し腹が立った。楽しいとか観光気分ですべてほしくない。

「君はこの時代でさまざまな人々と出会った。そして、離れがたいほど、大切な存在だと考える人にも出会ったんじゃないかな？」

なんだか悔しくなって、私はそっぽを向いた。

「……さて、あいさつはこれぐらいにしておいて、と」

居住まいを正し、チャーリーさんは私に向き合った。

「その人は、君にとって大事な人なのかな？ さあ、よく考えて。これは大切な質問だよ？ 君にとってその人は、現代での生活よりも大切なものなのかな？」

「それは……。……。よくわからない」

実はまだ迷ってる。現代に帰らなきゃ……。と思いつつも、この時代に心残りがあるのもたしかだ。

「……。へえ？ あんなに帰りたいた言っていたのに？」

そう、私はつい最近まで、自分が現代に帰ることを選ぶと信じて疑わなかった。

(でも、どうして……。帰らなきゃいけないと思うんだろ?)

家族や友達が待っているから？

生まれ育った世界だから？

すべてを捨てるのは無責任だから――？

(じゃあ、私を好きになってくれたあの人を置いて帰ることも、無責任なんじゃないの?)

私がいなくなったなら、あの子はどう思うんだろう。

私がないこの世界で、私のことを探し回ったりするのかもしれない。

まさか私が違う時代に帰ったとは思わないだろうから。

（――そんなことさせたくない）

私を必要としてくれるなら、そばにいたい。

「誰か、大切な人ができた？」

私はうなづいた。まぶたの裏が熱くなる。

「その人と離れたくないんだね」

もう1度、うなづいた。

たったそれだけの理由で私はここから動けずにいる。私がもう少し大人なら、きっとこんな気持ちに振り回されたりしないのかもしれない。

「それなら、離れなければいいよ」

チャーリーさんは難なく答えた。

「離れたくなければ、離れなければいい。おそらくその人も君と同じことを思っているはずだ」

「……そんなのわからない。簡単に言わないで」

「いいや、簡単な話さ」

「どんなに大がかりなマジックでも、タネあかしをしまえば仕掛けなんて拍子抜けするほど簡単なものなんだよ」

「……？」

説得力があるような、ないような。よくわからないたどえだった。

「信じられない？　じゃあ、これからすごいマジックを見せてあげよう」

「え？」

「芽衣ちゃんだけの特別サービスだ。今から、ここに君の大切な人が現れるからね」

「なに言ってるの」

そんなはずない。現れるわけがない。

「心配しなくても大丈夫だよ。明治だろうが現代だろうが、どこにいたって彼は君のこ
とを大切にしてくれるはずだから」

「チャーリーさんっ」

だんだんと喧噪が遠のいていく。人々の笑い声も、風が木々を揺らす音も。

*

——赤い月だけが、暗闇を照らし出す。

(チャーリーさん)

私は何度も呼びかけた。

(教えて。あなたは誰なの?)

その問いに答える代わりに、彼はニヤリと道化師のような笑顔を浮かべた。

「幸せになるんだよ、芽衣ちゃん」

ぱちんと、大きく指を鳴らした。

*

(あれ……)

遠のいたはずの喧噪が、気づいたら私の周囲に戻っていた。陽気な祭り囃子も、人々の笑い声も、風が木々を揺らす音も。

「芽衣? どうしたんだい?」

(えっ?)

私の隣には鷗外さんがいる。私と手をつないだまま、いつもの穏やかな笑みを浮かべ

ていた。

「まだなにか心残りがあるのかい？」

「……心残り？」

「そうとも。欲しいものがあるなら言ってごらん。なんでも買ってあげよう」

一瞬、鷗外さんがなにを言っているのかわからなかった。

（もしかして、夜店の食べ物のことを言ってるの？）

「いえ、大丈夫です」

私は小さく答えた。

（今はお腹空いてないもの）

それに、もうここに心残りはない。そう思ったから。

（でも鷗外さん……どうしてここにいるんだろ？）

いきなり現れたような気もするし、ずっと2人で、並んで歩いていたような気もする。

（チャーリーさんが私に幻でも見せてるの？）

それなら、それでもいい。こんなに大がかりで幸せな時間をくれるなら、奇術でも魔法でもかまわない。

「……どこに行くんですか？」

「決まっているではないか。家に帰るのだ」

「……家？ 誰の？」

「僕らの家だよ。この時代ではないがね。僕はもう、2度と失うつもりはない。これから
は『公』ではなく『私』の人生を歩むのだ。……おまえとともに」

彼の足は、どこかをまっすぐに目指している。

（そっか……）

これから私たちは家に帰るんだ。ここにはない、あの『家』へと。1人ではどうしても
動けなかった私の手を、鷗外さんが取ってくれた。

（帰りたい。鷗外さんと一緒に）

鷗外さんの決断を、本当に嬉しく思う。私を選んでくれたことを後悔させたくない。

この時代への心残りも、私がちゃんと受け止めるから……。

「さあおいで。僕の子リスちゃん」

「はい」

私は1歩踏み出した。鷗外さんと一緒に、歩いていける。これから帰る現代には、きつ
とそんな未来が待っている――。

*

——まぶたの向こうに、やわらかな光を感じた。

ざわざわと人の気配。子どもたちの笑い声。

(ここは……)

私は、この場所を知っている。あれは、今からちょうど1カ月前——

「さあ、お立ち会いお立ち会い！ 手前ここに取り出したる陣中膏じんちゅうこうはこれ、ガマの油。

ガマと言ってもそんじよそこらのガマとは物が違う！」

「ハイご通行中の皆様、容貌奇妙にして珍妙なるこの娘、親の因果が子に報い、生まれ出たるはへび女！ お代はあとで結構だよ、ハイ入って入って〜」

——私が明治時代に飛ばされてしまった、あの夜。

あの夜に訪れた縁日だ。そして私の隣には、鷗外さんがいる。彼は私の手を握りしめ、すでになにかを悟ったような顔で、私を見下ろしていた。

(どうして、ここに……?)

ただ1つわかるのは、ここは現代だということ。どうやら私と鷗外さんは、チャーリーさんの不思議なマジックによって、2人一緒に現代へと飛ばされてしまったらしい。

そして現代に帰ってきた私は、チャーリーさんの言葉どおり、すべての記憶を取り戻していた。

私は東京都のとある普通高校に通う、女子高生だ。成績は中の中、多くはないけど少なくともない友達に囲まれ、平凡な高校生活を送っていた。家族構成は、両親と妹が1人。親は骨董品屋を営み、私は幼い頃から古いものに囲まれて育った。飴色の茶箆筒に細竿の三味線、紫壇したんの文机。切子細工のガラスの灰皿。そんな古いものの匂いや手触りが大好きだったことを、現代に帰ってきてから思い出した。

*

——それから1年後。

明治時代から現代へとやってきた鷗外さんは、あいかかわらずあの屋敷で暮らしている。

明治時代にいたころと変わらずに小説を書き続け、ある日文壇デビューを果たした。

今では純文学に始まり、評論、翻訳、医療サスペンスなど……。作家として幅広いジャンルで活躍している。やはり『天才』と呼ばれる人は、どの時代でも才気がほとばしってしまいうものらしい。

——鷗外さんはもう、明治時代には帰らない。

この時代で生きることを決めた鷗外さんは、私にこう言ってくれた。

『言葉は時代をつなげる』と。

かつて明治で書き上げた鷗外さんの小説『舞姫』は、今も多くの人に読み継がれ、多様な解釈とともに広がりを見せ続けている。

ベルリンを舞台にした『舞姫』は、いったいどこまでが実話でどこまでが作り話なのか——。

それは鷗外さんと私だけが知っている、秘密だ。

*

(ん?)

自宅の骨董屋の前に立つと、店内に長身の男性がいるのが見えた。前屈みになって熱心に見ているのは、ガラスケースに入った九谷焼の大皿。その九谷焼は、華やかさの中でも上品さを失わない色使いで根強い人気のある骨董品だった。

店内の男性――鷗外さんはしばらくそれを眺めた後、かたわらの文机の引き出しを開けた。

「……鷗外さん？」

お店の扉を半分だけ開けて、そこから顔を出す。

「……ああ、子リスちゃんかい。お帰り」

目が合うと、鷗外さんは私を招き入れてくれた。

「なにをしていたんですか？」

「特になにをというわけではないのだが……この骨董品屋にいと落ち着くのだ。おまえにとっては古いだけの家具かもしれないが、僕にとってははどれも馴染み深いものでね。」

「……そうそう、この帳場筆筒ちやうばたんすに文机ふづくえ。僕の生まれ育った家にもあったような気がするな

あ」

しみじみとつぶやく言葉の端々に、生まれた時代への愛着が感じられ、ふと不安になった。

「あの……もしかして……帰りたかって、思ってます？ もとの時代に……」

「はは、そんなに声を出すんじゃない。僕はおまえとともにこの時代に来たことを、悔やんでいるわけではないのだ。確かに、あの時代に残してきたものは多々あるが……。なにかを得るには、必ず代償が付きまとう。その傷みと向き合うことを選んだのは、ほかでもないこの僕自身なのだからね」

やっぱり鷗外さんは包容力のある人だ。それはこの世界でも変わることはない。鷗外さんが前を向いているのだから、私だけ不安になってはいけない。

「……よかった」

そう言って微笑むと、鷗外さんは頷きながら嬉しそうに頭を撫でてくれた。

「ところで……」

懐から厚い紙の束を取り出すと、鷗外さんは机の上に広げた。

得意げに鼻をひくひくさせ、髪の毛を人差し指でトントンと叩く。

「新しい小説を書いたのだ。もちろん、パソコンというやつで」

「えっ」

「不思議なもので、異なる時代に来ても創作意欲は自然と湧き上がる。……僕に言葉があつてよかった。言葉は時代をつなげるのだ。シェイクスピアの戯曲や、アンデルセンの

童話のように」

さつきまでの郷愁はどこへやら、鷗外さんの瞳は新しい世界への興味で満ち溢れているように見えた。

どんな時代や場所でも、彼にとってはそこで起こることのすべてが知的好奇心を刺激する材料でしかないのかもしれない。

「……鷗外さんって、どこでも生きていけそうな気がします」

「はは、言われてみればそうかもしれない。ドイツに滞在した時も、意外と早くその土地の生活様式に馴染んだからなあ。かつて津和野から東京に移り住んだ時も、とくに不自由は感じなかったような……」

すると鷗外さんは、なにか思いついたのか目を輝かせた。

「……そうだ！　いつか津和野に行こうではないか」

「え？　この時代の、津和野ですか？」

「いかにも。時代が変わっても僕の故郷に変わりはない。僕の故郷の景色をおまえにも見せたいのだ」

ふわりと、優しく抱き寄せられる。私も自然と、鷗外さんの首に腕を回した。

「そういえば、津和野には森鷗外記念館があるって、知ってましたか？」

「森鷗外記念館……?」

私の言葉に、鷗外さんは目を丸くする。

「ははっ、なにを馬鹿なことを言っているのだ。僕は記念館などというものを建てられてしまうほどの人間ではない。まったく、夢でも見たのだろう。それともまだ寝ぼけているのだろうか」

「寝ぼけてなんてません。本当のことなんですから」

「……おやおや。やはり、まだ夢を見ているようだね。ん……」

「っ……」

小鳥がついばむようなキスをされ、今度は私が目を丸くする番だった。

「どうだ、起きたかい?」

「もう、なにするんですかっ」

「はは、今のは『おはようのチュー』だ。あとは『お姫様抱っこ』や『ピロートーク』という概念も学んだのだが……」

(なっ……!!)

「さて、いつ実践してみよう。それとも今、試してみてもいいかい?」

「えっ! あ、あのっ!」

ふわりと身体が浮く。鷗外さんに抱きあげられてしまった。

(……まったく、鷗外さんは)

いくら知的好奇心が旺盛だからって、そんなところまで学ばなくてもいいのに。

「さあ、これからたつぷりと実践しよう。僕のかわいい婚約者ファイアンセどの」

「ここはお店のなかです、いつお客さんが来るかわからないのでっ」

「ふむ、それもそうだ。では、おまえの部屋に行こう」

「っっ！ えっ、でもっ」

「こらこら、暴れるんじゃない。ここは黙って、僕に強くしがみつくな。強く強くしがみついて……僕のキスを受け入れるべきだ。そうだろう？」

「……っ……」

甘く、深く。すぐに舞い降りてくるキスは、いとも容易く私の力を奪い去る。

私はやっぱり、鷗外さんにはかなわない。いつの時代も。どこにいても。

(大好きです、鷗外さん)

「愛しているよ、子リスちゃん」

私の心の声に答えるように、彼は優しく目を細めた。

）
F
I
N
）